FM バックキャスト研修報告書
ASU 麻酔科におけるバイオデザインの実践

C グループ

1. 授業前の知識

バイオデザインという言葉を耳にしたことはあったが、その具体的な手法や医療分野への応用については理解しておらず、実践経験もなかった。また、本研修の対象である麻酔科業務についても事前知識がほとんどない状態での参加となった。

2. 授業の目的

本研修ではバイオデザイン思考の基本概念を学び、現場観察を通じて課題を抽出し、ニーズステートメントとして言語化するプロセスを体得することを目的とした。

3. 到達目標

現場観察から潜在的課題を抽出・分析し、医療者や事務職に伝わる形でニーズを論理的に表現できる力を習得することを目標とした。

4. 授業内容

【１日目】志賀先生からバイオデザインの概要に関する講義を受け、デザイン思考の考え方や医療分野における応用事例を通して理論的背景を学んだ。続いて、高橋先生から麻酔科の業務内容や現場の実情について説明を受けた。その後、手術室で現場観察を行い、気づきや課題を付箋に書き出した。これらの情報をもとに、グループ内で観察内容を共有した。

【２日目】ICU で現場観察を行い、前日と同様に気づいた点を付箋に記録した。その後、診療看護師の引率のもと、再度手術室を訪れ、1 日目の疑問点について医療スタッフへのインタビューを通じて深掘りした。これらをもとに初期のニーズステートメント「Y にとって、Z するために、X する方法」を作成した。記述にあたっては方法と結果を混同せず、因果関係を明確にするよう心がけた。

【３日目】麻酔科外来および材料部にて現場観察を行い、手術以外の業務や物品管理の実態についても理解を深めた。午後には、高橋先生に対して観察から生じた疑問を直接質問し、背景や制約に関する補足情報を得た。その後、既存のニーズステートメントを見直し、内容の改善や新たな視点を加えた。

【４日目】再度 ICU にて観察とインタビューを行い、仮説を検証した。これまでに作成した 13 件のニーズステートメントについて、「患者へのインパクト」「医療者へのインパクト」「市場性」「安全性」「グループの興味」の 5 軸で評価し、各課題の本質的価値を数値化した。この分析結果をもとに、ニーズステートメントを 2 件に絞り、詳細な検討を開始した。また、山内先生および金髙先生とのランチミーティングを通して互いの専門性への理解を深め、さらに塩野義製薬株式会社 取締役副社長 澤田拓子先生とのビジネスメンタリングでは、製薬業界の現状やビジネス視点の思考を学んだ。

【５日目】選定した２件のニーズステートメントについてさらに深掘りし、プレゼンテーションとして成果発表を行った。また、５日間の研修を振り返り、グループ内で学びや気づきを共有した。各自が自身の観察からニーズ抽出のプロセスを振り返り、今後の学びや研究への応用可能性についても意見交換を行った。

5. 研究や仕事などに活かせる点

研修を通じて鍛えられたのは、「曖昧な課題を明確に言語化し、構造化して伝える力」であった。ニーズステートメントの作成では観察結果をもとに、目的や方法を整理する必要があり、論理的な思考力と表現力が求められた。これは研究においても、課題設定や仮説の明確化、発表・論文執筆など、さまざまな場面に応用できる。今後も、自分の考えを正確に伝える力をさらに磨いていきたい。

6. 影響を受けたこと

最も影響を受けたのは、「観察に基づく思考の重要性」と「多様な視点を取り入れる姿勢」である。特に印象的だったのは、医療現場の複雑性と、そこに内在する構造的課題が、一見して分かりづらい形で存在している点である。現場観察や医療従事者へのインタビューを通じて、表面化していない非効率や課題が、日常業務の中に埋もれていることを知り、問題解決においては可視化されていない部分に着目する重要性を実感した。また、グループメンバーや医療スタッフと対話を重ねる中で、自分自身の視点が限られていることにも気づかされ、他者の意見を柔軟に取り入れる姿勢の大切さを学んだ。このように、ニーズ抽出の過程で培った観察力と共感力は、今後の研究活動や実務においても活かせる基盤となると確信している。

7. 来年度以降の改善点

来年度以降は、患者へのインタビュー機会の導入が望まれる。現場の医療従事者から得た知見は有用だったが、患者の「不安」「待ち時間への不満」「情報の不足」といった主観的な体験は、医療者の視点だけでは捉えきれない。倫理的配慮のもとで患者の声を取り入れることで、より本質的かつ多面的なニーズの発見につながると考える。

8. 授業の限界

本研修は短期間であったため、観察・インタビュー・ニーズ抽出といった一連のプロセスを十分に深掘りするには時間的制約が大きかった。また、医療現場は専門性が高く、短期間かつ事前知識が不十分な状態では、観察内容の理解や本質的な課題の抽出に限界があった。

9. まとめ

本研修を通じて、「ニーズ起点」の課題解決思考を実践的に学んだ。観察に基づく問題発見とその客観的な言語化は、医療現場に限らず研究やビジネスにも応用可能な汎用的スキルであると認識した。今後は、得られた知見を各々の研究分野に応用し、課題の本質を捉える思考力を一層深めていきたい。